研究所の成り立ち

現在の女子栄養大学栄養科学研究所の前身にあたる香川研究所は、1936（昭和11）年、本学園創立者香川昇三と綾が東京帝国大学医学部附属医院で行ってきた研究を継続するために、本学園発祥の地である小石川駕籠町（現在の東京都文京区本駒込）に設立されました。明治から昭和初期にかけて、人口の都市化に伴って日本人は精白米を多食し、副食が乏しいなどの偏った食事から、食事中のビタミンB1が欠乏し、脚気患者が多発していました。ビタミンB1は白米に少なく、胚芽米が脚気の予防に効果があると立証した東京帝国大学医学部の島薗順次郎教授※は、白米の搗精法を改良しビタミンB1の多い胚芽米を作り、これを普及して脚気を治療し、かつ予防して多くの人の健康を守りました。この脚気研究グループの主要なメンバーとして島薗内科医局に在籍していたのが本学園創立者の香川昇三と綾です。以来、栄養学の研究と共に、これを社会活動として実践運動をすすめることになりました。

※島薗順次郎（1877-1937年）香川綾と同郷の和歌山県出身、日露戦争での陸軍軍医経験から日本兵に脚気が多い実態を知り脚気の研究に取り組み、世界で初めて原因を臨床的に解明し、食事による予防法を打ち出しました。東京帝国大学医学部教授として島薗内科を主宰（1924-1937年）、同附属医院院長（1933-1937年）を務めました。

1943（昭和18）年 香川研究所の前で
前列左から３人目が香川昇三

本学園の研究所が、女子栄養大学栄養科学研究所として改めて設立されたのは1990（平成2）年、生活習慣病予防に時代が注目していた頃です。現在は埼玉県坂戸市に拠点を置き、国内外の科学、栄養学の進歩を取り入れて研究を進めています。本研究所は学校法人香川栄養学園の教育機関を跨いだ研究活動を統括する組織で、大学・大学院・短期大学部と専門学校に所属している全ての専任教員は研究所の所員を兼任しています。さらに学外の研究者や若手の研究者が客員所員や客員研究員として活発な活動を行っています。

女子栄養大学栄養科学研究所
- 健康科学部門
- 実践栄養学部門
- 生活文化・社会科学部門
- スポーツ栄養学部門

女子栄養大学栄養クリニック

アイソトープ研究室

〈健康科学部門〉
医療・検査および基礎科学の観点から研究を行い、人々の健康向上の探求を行っています。

〈実践栄養学部門〉
食物の成分や機能に関する研究、各ライフステージの人々に対する研究・栄養教育活動から、日常生活における実践的な調理技術や高度な栄養知識の普及を図っています。

〈生活文化・社会科学部門〉
食と健康に関わる生活・文化・社会科学要因に関する研究から、国際的な食文化に対する理解と健康促進に向けたプログラムの開発を行っています。

〈スポーツ栄養学部門〉
食と運動による人々の健康の維持と促進におよぼす効果を探求し、食を含む関連要因に対する理解を深めてスポーツパフォーマンス向上の実現を行っています。

女子栄養大学栄養クリニック（付置施設）
生活習慣病の予防と治療を目的に、食事指導をベースとした栄養教育プログラムの開発とその実践的展開を行う他、実践栄養学の専門家育成のための研修も行っています。現在は栄養科学研究所の傘下にありますが、当クリニックは本学に大学院が設置された1969（昭和44）年に開設されました。

アイソトープ研究室（付置施設）
放射性同位元素を用いた研究及び臨床検査技師としての資質向上に資するための教育の場として設置しています。